

● シリーズ 私の見た日本 Vol.250

部屋は、いつ部屋になるのか

郭 舒董 (カク ショドウ)

2020年、北京・中央美術学院建築学科卒業。2020～2024年、上海・杭州のJuly&Partnersにてランドスケープデザインに従事。2026年、東京藝術大学大学院建築専攻修士課程修了。同年度東京藝術大学「サロン・ド・ブランタン賞」、日本建築学会「優秀修士論文賞」を受賞。現在、同大学院博士後期課程・光井渉研究室にて、中国の城郭都市を研究している。



「部屋の性格」は、一体いつ決められるのか。機能や規模、装飾や家具といった「性格」を構成する要素が、建てられた時点で既に計画されたのか。それとも、人が自らの身体、視線、そして部屋に至る経路を通して空間を経験するなかで、その性格を見出していくのだろうか。日本に来てから、これまで私が暮らしてきた中国の住宅とは全く異なる空間関係に触れながら、この疑問を抱くようになった。

閉じた部屋と開いた部屋

幼い頃から、「フルシチョフカ」と呼ばれた家に暮らし、その後、2010年代に普及し始めた「第三代住宅」へ引越した。玄関から入ると、リビング、キッチン、ダイニングが一体化し、短い廊下がその両側に並び寝室や書斎などを結び、いわゆる標準化設計に基づく「nLDK型」の家である。固定されたRC壁と閉じられた扉によって、部屋の内部と、自分が立っている場所が明確に隔てられている。一方、親が住んでいた伝統的な木造・レンガ造の家では、建物群が中庭を囲むように配置されていた。各部屋には、独立した出入り口が設けられ、屋外の軒下の通路につながっていた。どちらも、扉を開けるまで、部屋の内部で何が起こったのかを観測できない。自分の行動によって、その部屋に働きかけることもできなかった。自分にとって、こうした部屋は閉じた箱のような、怯えを感じる未知の存在

であった。日本の民家を調査するなかで、玄関に入ると、幾重にも重なる部屋や庭が視線の先に連続して展開していく風景が見えてくる。部屋の内部と自分との相対関係を把握でき、これにより、自分がその部屋と強く関わっていることに気づいた。これらの部屋は出入り口を共有し、襖や格子戸などの建具の開閉によって、室内が開放的な空間となっている。部屋どうしの間や、部屋と庭との間には、互いを見通せる。さらに、歩いていくと、部屋を通してすぐに次の部屋に入り、空間が順につながって現れてくる。しかし、それぞれの部屋は似た規模や輪郭をもち、同じような床仕上げが用いられており、固定された家具もほとんどない。さっきまで同じように見えていた部屋の一つが、なぜか急に「客をもてなす空間」から「家族の空間」や「寝室」へと変わって、異なる部屋として感じられてくる。

人の行動によって組み立てられる部屋

まず、日本の部屋とは、どのような存在なのか。私が日本の伝統的な部屋を識別する手がかりとして、床の間や違い棚などの室礼が挙げられる。これらの要素が高度にしつらえられた空間が、私にとって茶室である。茶室に入る際、客は露地を通り、躰口をくぐって腰を下ろし、室内へ入る。一方、亭主は勝手口から入り、戸を閉じることで、茶室は一時的

に外部から切り離された空間となる。そして、座る、見る、礼をする、茶を点てる、茶碗を受け取るといった一連の行為に伴って、茶会が進んでいく。また、客と亭主の位置関係や身体の動きに応じて、床の間や炉、窓などの位置や寸法が決められている。特に、台目構という仕切り装置は、透かされた部位から亭主の手元で茶を点てる動作だけを切り取る一方、亭主の上半身への視線を遮っている。すなわち、床の間や台目構、また天井の形式や畳の敷き方などは、単なる装飾ではなく、人が何を見ようとし、どのような行動をしようとするのかに応じて施されている。このことから、日本の部屋とは、その内部での身体、視線、行動と緊密に結びついているものだという認識に至った。

建築群から経路と一体化した部屋へ

中国では、庭を持つ建造物群において、滞在するための建物が廊や露地などの経路によって結ばれている。石張りの土間を介して、室内と庭との間にも連続的な空間体験が生じていた。それに対して、平安時代の寝殿造では、中国の都城や宮殿にみられる建築群の配置を参照しながら、高床式を用いることで、床の高さによって、庭から明確に隔てられた室内空間が形成された。寝殿や対屋などの建物が廊によって結ばれ、独立した「経路」を介して、建物群が一つの「住宅」になった。そうすると、それぞれの建物は、

一つの「部屋」のような空間単位となっていたと考えている。中世以降、こうした建物群の構成が縮小され、一つの屋根の下に複数の空間に分割されるようになった。元々建築ごとに分かれていた機能が、それぞれの部屋に組み込まれた。さらに、「経路」としての廊も短縮され、次第に建物の内部へと取り込まれた。こうして、建物群の配置によって作られた秩序が、徐々に建物内部の部屋どうしの関係として現れてきた。

経路での経験が積み重ねられる部屋

私が日本の映画を見ていて印象的だったのが、書院造の空間における対面の場面である。畳の高さや敷き方、座敷飾りなどが、そこに座る人の位置や向きとともに、身分の格差を示している。一方、対面を行う前段のバッファにあたる隣の部屋からその場を眺めると、境界にある建具や人の位置などが、一つのまとまりとして視野に入ってくる。そこで私が感じたのは、その部屋の格式や、そこに至るまでの距離感であった。このことから、部屋の性格は、単にその内部における行為だけによって成立するのではなく、外部から向けられる視線によって認識されることで、「使われる空間」であると同時に、「見られる空間」として立ち現れてくる。そして、より簡略化された武家住宅では、一つの建物からなる住宅の中で、座敷飾りによって

部屋の機能を示す空間を中心に、玄関から奥と続く室内の主な経路に沿って、境界を共有する部屋が並びことで、続間座敷が形成されていった。結果として、廊がほとんど省略され、経路は次第に部屋と一体化していった。その影響を受けた農家では、隣接する部屋がつなぎ合わされることで、住宅全体の経路を形成している。全ての建具を開け放つと、それぞれの部屋の内部を一望に収めることができる。室内の暗闇が庭からの光に染められている。視野のなかで、水平に連続する明暗が混ざり合い、リボンのような風景が浮かび上がる。玄関から奥へ進む身体的な経路が、客と家族、表と奥といった関係を持つ部屋をつないでいる。こうした空間は、人の居住にまつわる行為を単に受け入れる器ではなく、家庭的かつ社会的な関係が重なり合う空間となっている。

都市から住宅へ続く経路に生じる部屋

都市のなかでは、建物と人との関係は居住することのほか、見る、近づく、立ち止まる、通り過ぎるといったさまざまな行為を通して生じている。町家では、トオリニワを通して、街路に面した店、通路に面した座敷、庭に面した奥、さらに庭へ空間がつながっている。また、街路と直結する土間と奥の部屋との間には段差が設けられ、暖簾や建具によって都市と家庭の境界が形成されている。街路から建物へ入っていく

過程のなかで、部屋の性格も経路によってつけられている。ここでは、街並みを形成する建物においては、部屋は内部の行動だけによって完結するものではなく、都市から住宅へ、さらに住宅の内部の部屋へと進む経路のなかで、都市の空間と住宅の部屋が連続している。その上、人は建物の内部に入らなくても、外部をその部屋を見ることや、その空間にいる人々との社会的関係を通して、その性格の形成に関わっている。

身体と社会のなかで生まれる部屋

劇場では、舞台が役者によって変化すると同時に、観客も舞台のあり方に影響を与えている。舞台のような日本の部屋を見て、そこにいる人は空間によって一方的に規定されるのではなく、能動的に空間を設定する存在であることを強く感じている。人は経路を通り、視線を向け、距離や明暗、見通しを身体で経験する。自分自身と部屋との関係を認識するたびに、部屋の性格を少しずつ彫り出しているのだろう。都市において、人は街路からどの建物に入り、何を見ながら、どこまで内部の部屋へ進んだのか。こうした経路や身体的経験に基づく空間には、人々の生活や社会的な関係が刻まれている。このような痕跡から、空間・身体・社会の相互関係を読み解き、都市空間を理解することは、私の都市史研究の原点となっている。



図1 幾重にも重なる部屋(鹿島市 旧栗田家住宅)



図2 床の間と台目構(京都府 無鄰菴)



上／図3 建物から独立した廊(京都府 南禅寺)
下／図4 建物に取り込まれる廊(京都府 南禅寺)



図5 部屋と一体化した経路(福山市 太田家住宅)



図6 明暗が混ざり合うリボンのような風景(秩父市 内田家住宅)



図7 トオリニワに設けられた境界(福山市 鞆の津の商家)